

菩薩が貞觀元年既に回鶻に君長たりしことは疑無けれど、其の在世が此の後何年に及びしかは又詳かならず、冊府元龜^{卷九}朝貢篇によれば「貞觀十二年八月、廻紇菩薩南過賀蘭山、臨黃河、遣使入貢」と見え、又同書^{卷九}助國討伐篇に「貞觀二十二年、廻紇菩薩遣使入貢、以破薛延陀功、賜宴內殿」と見ゆれど、思ふに此の兩項の記事は編者偶然の誤謬に過ぎざるが如し、舊唐書廻紇傳によれば「廻紇酋帥吐迷度、與諸部大破薛延陀多彌可汗、遂併其部曲、奄有其地、貞觀二十年、南過賀蘭山、臨黃河、遣使入貢、以破薛延陀功、賜宴內殿」と記せり、此の記事を以て前記冊府元龜の兩項と比較する時は、冊府元龜の貞觀十二年八月及び二十二年に於て菩薩につきて記せる所は、舊唐書が同二十年吐迷度即ち菩薩に次で部酋となりし人につきて記せる所と字句全く相合するを認むべし、偕て冊府元龜が別に繼襲篇^{卷九}六七に載する所を見るに「貞觀二十年太宗以其部爲瀚海州、拜其俟利發吐迷度、爲都督、時吐迷度既自稱可汗、二十二年吐迷度爲其姪烏紇所殺、其子婆閏立」と記さる、之によれば貞觀二十年には既に吐迷度が部酋たり、同二十二年には其の子婆閏が代り立ちしものにして、前掲助國討伐篇に貞觀二十二年菩薩が尙生存し、唐に使を遣したりと記せる所と相容れず、而して兩記事の中、繼襲篇の記事の正しかるべきことは、新舊唐書の回鶻傳に「貞觀二十年の事件たる薛延陀征伐を以て、回鶻部酋吐迷度の功と爲すに鑒むるも疑ふ可き餘地無く、通鑑も之によりて「貞觀二十年六月……回紇酋長吐迷度與僕骨同羅共擊之（薛延陀多彌可汗）、多彌大敗」と記せり、されば此の助國討伐篇の記事に見ゆる菩薩の名は、編者が回鶻部酋繼承の年代に通ぜず、爲に吐迷度と記すべきを誤りて菩薩と記したるものと認めざる可らず、又助國討伐篇には菩薩（即ち吐迷度の誤）が使を遣して入貢したる年を以て貞觀二十二年と記せども、此の時薛延陀を破れる功を以て宴を內殿に賜へりと記さるれば、之も貞觀二十年薛延陀を破りし